

北海道 周遊乗車券

池田 隆

大きな見出し『終点まだまだ 日本全駅制覇』の新聞記事（2022/9/11朝日）が目にとまった。定年後十六年かけて全国すべての駅を撮影してきた人の紹介記事である。「きっかけは半世紀前の切符という。所狭しと途中下車した駅のスタンプが押された北海道周遊乗車券を同僚に見せたら、「こんな切符が今も残っているんですね」と。大学時代に使った昭和四十年の切符だった。・・・」とある。

あれ！ 俺も同じような切符を残しておいた筈だ。高校の親友K君と二人で、大学時代の夏休みに北海道を周遊したときのアルバムを探し出した。たしかに昭和三十四年発行の切符が貼ってある。東京から北海道内国鉄全線までの往復乗車券だ。十八日間有効で、値段は学割を使って三千七百円の半額。苫小牧、様似、帯広、落合、池田、足寄、根室標津、標茶、北浜、網走、旭川、稚内、札幌、壮瞥、函館など、下車した駅の押印が順に並ぶ。

父親の古いカメラに36枚撮りの貴重なモノクロ・フィルム、ワンショットワンショットに心を込め、現像印刷も自身で行ったことを思い出す。一冊のアルバムが写真だけでは埋まらず、絵葉書や乗車券なども加えていたのだ。北海道学芸大学旭川分校全寮の「金壱百五十円、食費五十円、宿泊費百円、二人分」と書かれた領収書もある。宿泊費節約のため、だぶだぶのヤツケを着て米軍中古品のシュラフを横長ザックに背負う。後に「カニ族」と揶揄される格好だった。

帯広畜産大学や北海道大学の学生寮、足寄高校の医務室、屈斜路湖や網走湖のキャンプ場の貸テント、羅臼の村営温泉場、幌泉のニコニコ荘などユースホステル、宗谷本線の夜行列車、層雲峡では橋の下で眠った。

なかでも最果ての終着駅、根室標津のこと。冷たい夜霧のなか待合室で横になっていると、最終列車の到着後に駅舎を閉じるという。困り顔の我々を見て、「構内に止めた客車の扉を開けとくよ。ただし中で火は使わないよ」と言ってくれた駅員さんの心遣いが今でも忘れられない。

